

災害復興および防災における 民間支援はなぜ必要なのか

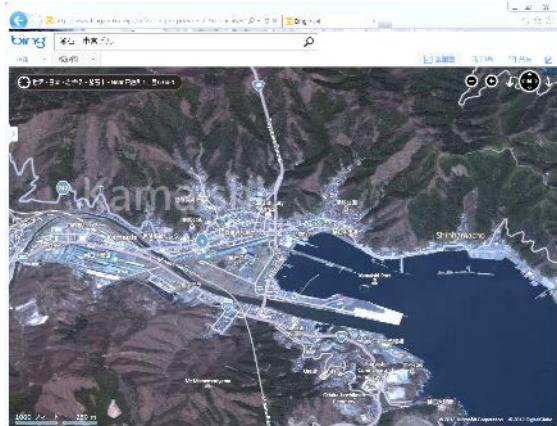
～官民協働による復興とその先の地域づくりのために～

NPO法人@リアスNPOサポートセンター
代表理事 鹿野順一

自己紹介



- 鹿野順一（かのじゅんいち）
- 1965年、岩手県釜石市生まれ
- 本業は菓子店経営。(株)玉泉堂
- 高校、大学でラグビー部
- 京都の菓子店で修業後釜石へ戻り家業に従事
- 商店街活動の傍らまちづくり事業を開始
- 2004年NPO法人@リアスNPOサポートセンター設立
- 2011年3月11日東日本大震災により被災
- 2011年4月28日いわて連携復興センター設立
- 現在に至る



3.11 大津波襲来

東日本大震災

3月11日、午後2時46分ごろ、かつて経験したことのない揺れがこのまちを襲った。

そのとき、誰もが津波の襲来を予感した。

襲ってきたのは我々の想像をはるかに超えた大津波。

その津波は、まちを破壊し、尊い人命、幸せな生活、大切な財産を一瞬にして奪っていった。

【被害状況】

地区名	死亡者・行方不明者数 ※8月1日現在	被災住家数 ※7月21日現在
釜石地区	229	1,485 (108)
平田地区	24	389 (117)
中妻地区	27	134 (134)
甲子地区	14	107 (107)
小佐野地区	28	145 (145)
鶴住居地区	583	1,737 (49)
栗橋地区	7	2 (2)
唐丹地区	21	377 (31)
他市町村・身元不明	181	—
合計	1,114	4,376 (691)

※死亡者数は釜石市で遺体収容された数。被災住家数のカッコ書きは地震被害数(内数)です。

東日本大震災
真魂と復興
ANBAROU KAMATSHI

緊急サイレンと避難を呼び掛ける声。釜石湾を襲った津波は、最大波9.3メートル。防潮堤を軽々と越え、市街地に流れ込むと、建物を破壊し、車を流し、濁流となってまちを飲み込んだ。

目を覆うような惨状に、誰もが声を失った。数分の静寂の後、引き波が始まる。がれき、家財、車、あらゆる物を海へさらって行く。

津波は二度、三度とまちを襲った。余震は収まる気配がなく、何度も地面を揺らした。日没が迫る。この日、9000人を越える人がそれぞれの避難場所を不安な夜を過ごした。

この地震が引き起こした大津波は、東日本太平洋側沿岸に広い範囲で襲い掛かった。





自分たちにできることを



釜石まるごと情報WEB Cadatte



岩手 釜石・大槌 復興カメラ



HOME-FOR-ALL みんなの家



みんなの家・かだって



- 2012年6月23日 OPEN!!
- 建築家・伊東豊雄氏が設計し、当法人が管理運営をしている。
- 近隣住民の皆さんの他、まちづくりワークショップや様々なイベントに活用されている。
- 多くの団体、企業からの支援により、憩いと賑わいの場としての機能が充実
- 2014. 06
累積来館者数10000人突破



ICTを活用した事業展開

生活再建移行期被災者支援連絡員事業

釜石仮設連絡員事業(構想)

- 避難所での様々な混乱を仮設住宅で繰り返さないためのゲートキーパー
- 仮設におけるコミュニティ形成のサポート
- 被災地において雇用を生み出すため(緊急雇用創出事業)

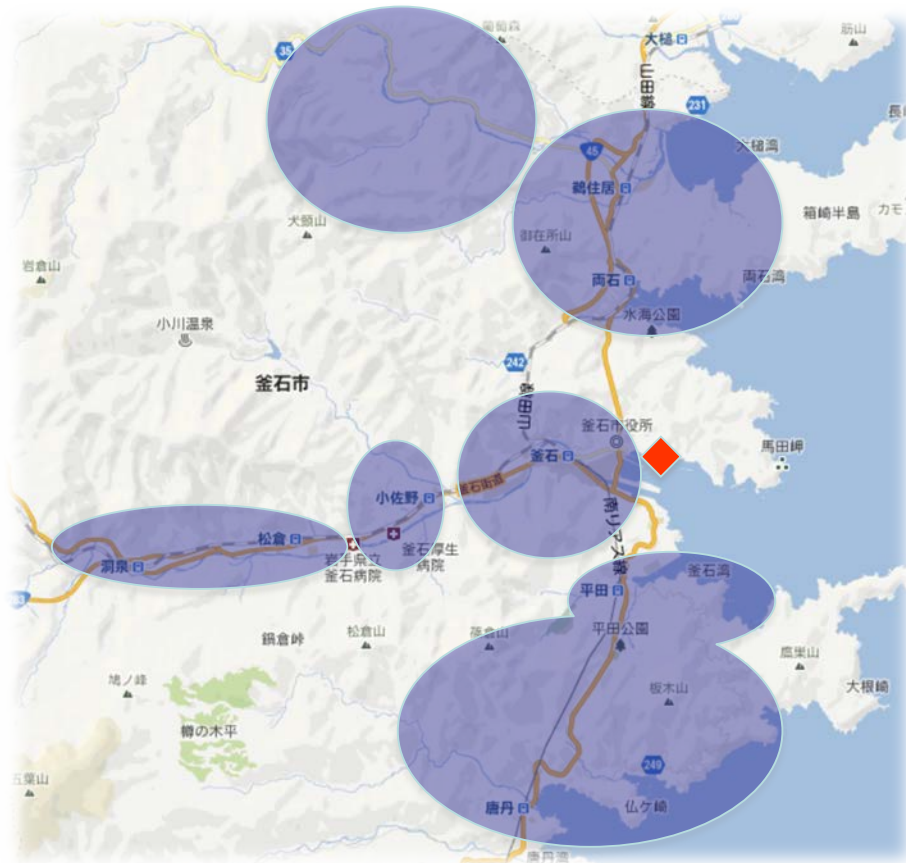
想定される課題を予測し、2011年9月に@リアスNPOサポートセンターから釜石市へ事業提案を行った。

釜石仮設住宅支援連絡員事業概要

			仮設団地数	仮設住宅戸数	復興公営団地数	復興公営住宅数		スタッフ・人員	主な業務内容
1期	h24/2	h24/3							事業本格化へ向けた準備的な位置づけ
2期	h24/4	h24/9	66	3164	—	—		78	1日3回の訪問 (集会所常駐)
3期					—	—		92	// 25年3月31日ので契約変更
4期	h25/4	h26/3	66	3164	—	—		75	1日2回の訪問 (以降団地巡回型)
5期	h26/4	h27/3	66	3158	5	228		36	1日1回の訪問・空室管理作業・引越補助作業
6期	h27/4	h28/3	65	3070	7	393		31	
7期	h28/4	h29/3	62	2934	12	462		26	復興住宅訪問開始
8期	h29/4	h30/3	47	2182	33	914		23	
9期	h30/4	h31/3	43	2137	41	1213		20	
10期									
11年目									

※各数値は年度当初時点での数値

釜石市仮設住宅支援連絡員事業

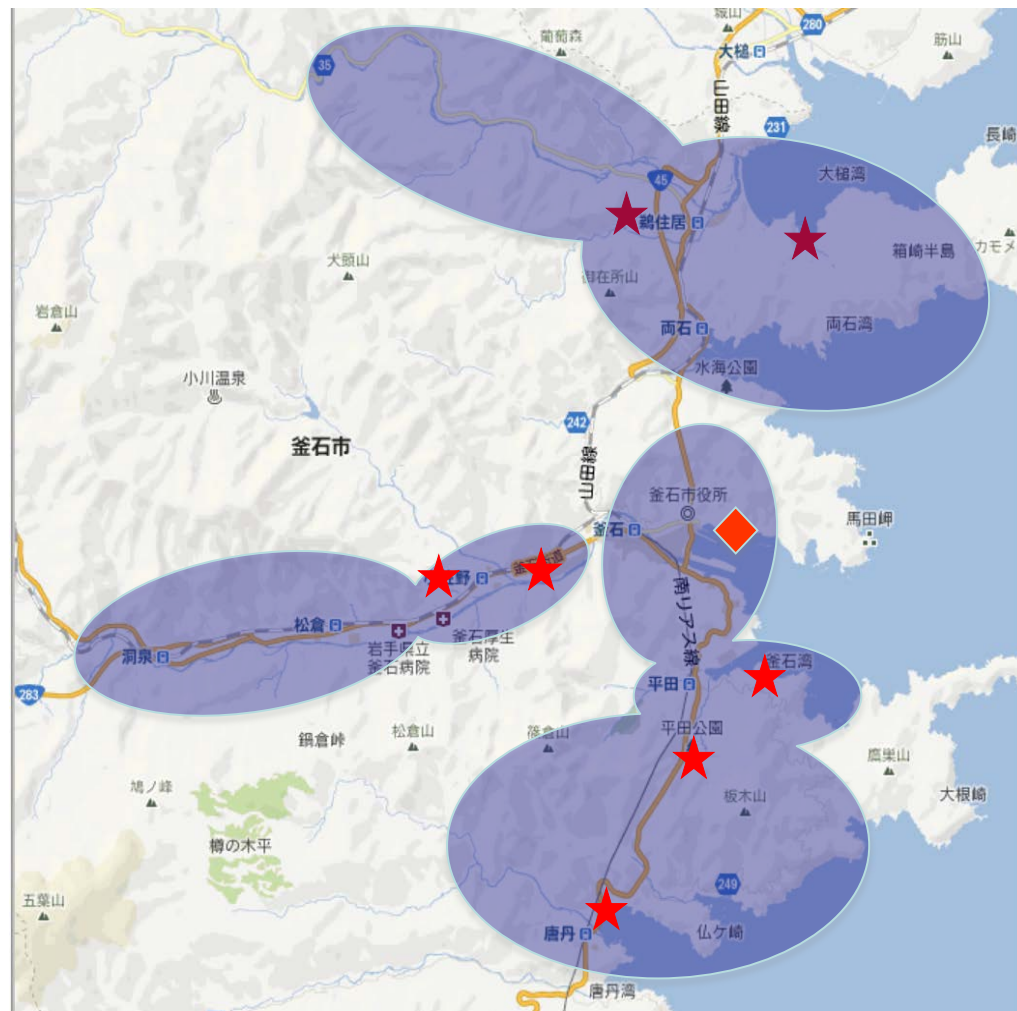


- ・仮設住民のサポート
市内仮設住宅団地(66団地)の巡回
見回り(生活環境)と見守り(住民)
- ・快適な生活
- ・コミュニティ(自治会)
- ・つなぎ役
- ・行政と住民
- ・困り事と解決策
- ・必要な情報

事業本部・現場スタッフ 計90名(2012年)

現在は日本マイクロソフト様の協力により、タブレット端末を利用したリアルタイムでの
情報更新を実現。 ※2016年4月から復興公営住宅の巡回も開始

釜石市仮設住宅支援連絡員事業



- 連絡員は、事務所に出勤。
- 事務所から決められたルートに基づき、仮設団地の巡回を1日1回行います（3ルート＋復興公営）
- 稼働時間 8:30～17:30
（土日祝日もシフト稼働で行う）
- 本部事務所を設置し、電話事務や各種資料配布等、対外的な事業を担当
- 復興公営住宅へは週2回の訪問を実施する
- 釜石市からの指示、連絡に関しては、本部経由か、市の担当課より直接伝えられる

人員構成

事業統括	1人
本部スタッフ	2人
本部アシスタント	2人
連絡員	18人



現在は日本マイクロソフト株式会社様の協力により、タブレット端末を利用したリアルタイムでの情報更新を実現。

CRM巡回管理システム

<外部向け機能>

- ・ 限られた人のみに機能の利用を許可します
- ・ 閲覧・入力については、@リアスが制限を設定します



<巡回担当者>

- ・ 巡回記録の作成します
- ・ 現地で受けた相談記録を作成します
- ・ 相談への対応状況を参照し相談者に報告します



巡回担当者



Microsoft Dynamics CRM

インターネット

効率的な入力・出力・共有



@リアス 本部

<@リアス>

- ・ 巡回記録や相談記録を参照します
- ・ Outlookと連携し、メールのやり取りを相談等に記録します
- ・ Excelと連携し、状況を即座に確認し相談等の進捗を確認します

クラウドツール活用



連携



<WEB会議>

- 同じ場所に集まらなくても、顔を見ながらの会議や報告が可能
- インターネットのある環境であれば、電話代をかけずに通話できる
- パソコン操作を会議参加メンバーに代行してもらえる。PCの設定も遠隔地で。



<メール>

- 全員がメールを利用できる
- パソコンやスマートフォンで利用でき、どこからでも情報交換が可能
- OutlookからLyncやSharePointの情報へ簡単にアクセス
- ウイルス感染等の危険度が大幅に減少



<情報共有>

- 事務局で使用する書類や報告書などを保管
- 遠隔地においても書類のやり取りが可能
- データ保全の対策がされているので、情報紛失のリスクが大幅に減少
- お知らせや予定を掲載したり、ディスカッションを行ったりできる

時間・場所を問わない活動

システムの目指すところ

- ▶ 仮設住宅
 - ▶ 仮設住宅の在室状況を確認できるように
 - ▶ 在室状況を行政と共有できるように
 - ▶ 仮設住宅に住む人に関する情報を記録できるように
- ▶ 巡回情報・相談内容
 - ▶ 対応に関する履歴を参照可能な形で蓄積
 - ▶ 検索したいと思う項目での情報抽出が容易なように

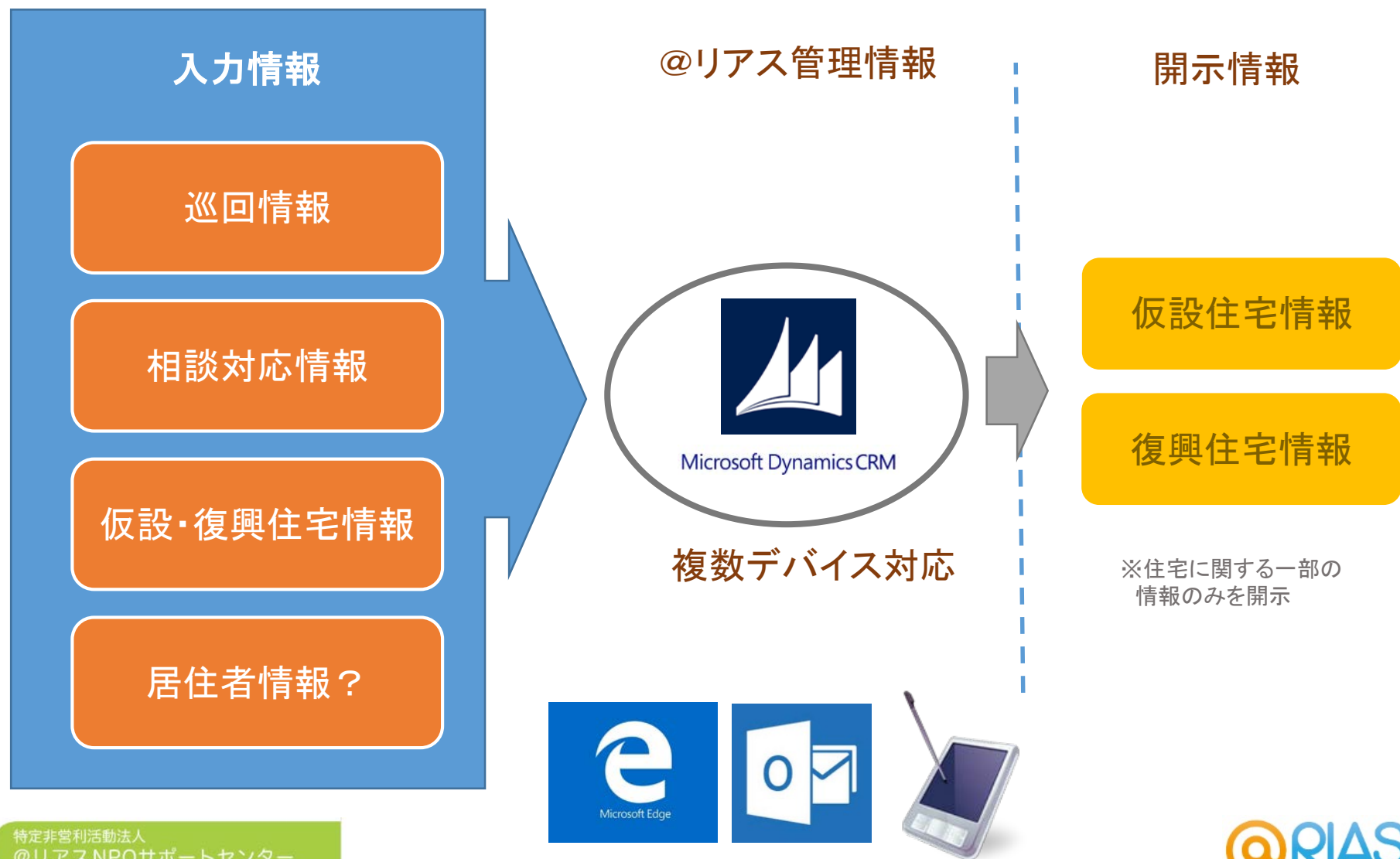


仮設住宅利用者への
対応の質向上

支援業務効率化

行政・他団体との
連携

システム概要



災害復興および防災において

《民間支援は必要不可欠》

なぜなら



大規模災害発災後の現実

- 被災エリアにおける広域停電
- 各集落をつなぐ交通網の遮断・分断
- 通信インフラの崩壊による情報遮断
- 人員確保所在確認が困難
- 行政施設の機能低下

しかも

災害発生時に行政が行うべき膨大な作業量

- 災害対策本部設置
- 住民避難周知
- 現状把握
- 被災状況確認
- 道路啓開(交通網確保)
- 避難所設置・運営
- 災害ボランティアセンター設置
- 物資・食糧調達
- 被災者・避難者確認掌握
- 行方不明者搜索
- 遺体安置所設置
- 国・県との調整連絡

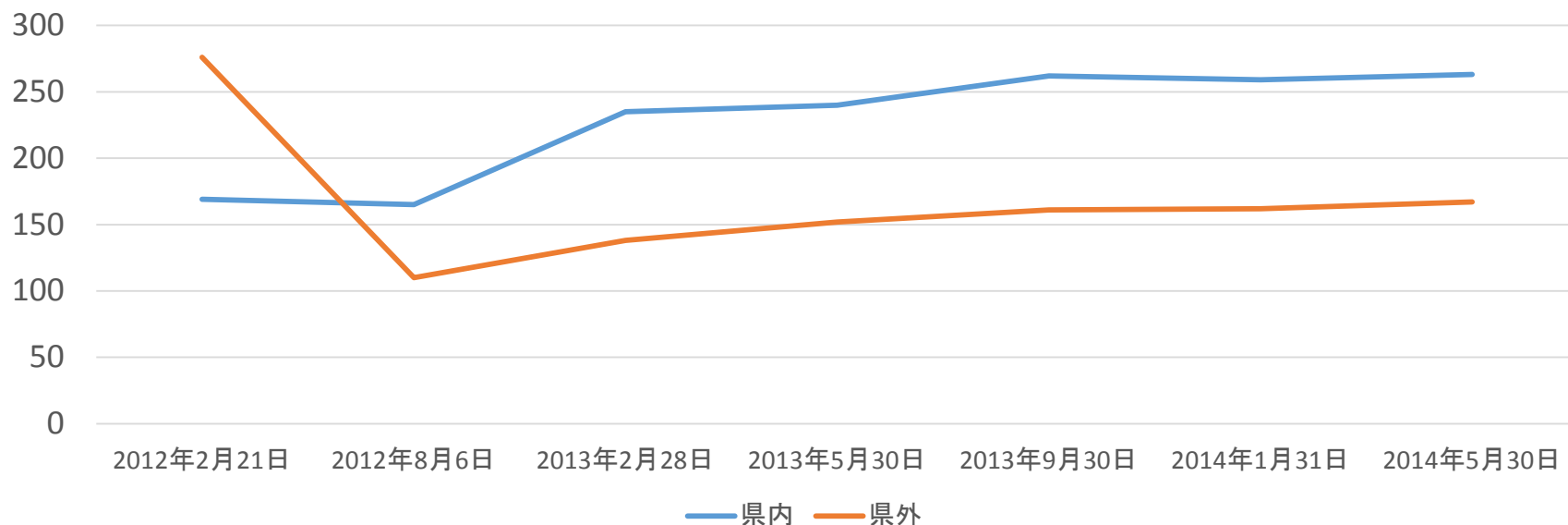
上記項目は初動のごく一部であり、自らも被災した行政がすべてを行うのは不可能

民間支援者推移

～東日本大震災における岩手県への民間支援～

支援者としての民間

震災後岩手に関わった支援団体の推移



	2012年2月	2012年8月	2013年2月	2013年5月	2013年9月	2014年1月	2014年5月
県内	169	165	235	240	262	259	263
県外	276	110	138	152	161	162	167

いわて連携復興センター調べ

支援者としての民間

- 国内他地域のNPO
- 本来海外で活動をしているNGO
- ボランティア団体
- 企業・団体
- 被災現地のNPO
- 被災現地の自主的な活動グループ

民間支援における課題

- 支援側は経験則に基づいて積み上げたノウハウを持っている
- 被災現地（行政）には受援のノウハウがない
- 突然起きる災害時にそれらがマッチしない

認める勇気

～立場が違うだけ 想いは一緒～

否定するのではなく、認め合うこと。

そして主張をぶつけ合うのではなく折り合いをつけること。
相手の強みと自分の弱みを補い合うことで、今その場に必要なることを協働で行う意識を持つこと。

いつどこが被災地となるのかは誰もわからない。
今、この瞬間から1人1人が意識を変えること。
そのことが《民間支援》の可能性を高めることにつながる。

～平時における経験が有事に生きる～

- 誰かだけが頑張っても復興は進まない
 - 行政の強み、住民(NPO)の強み、(支援者の強み)
- 協働・連携という考え方
 - 地域(被災地)における役割と責任の分担
- マルチステークホルダープロセス
 - 立場を超えた議論の場における意思疎通と合意形成

**日常の経験が受援力の向上と効果的な
マッチングのシステム構築へとつながる**

被災地支援に関わった
すべての方に感謝します。
ありがとう